

第二章 分析する

1. 批評理論とは？

- ・先人の業績、過去の蓄積を参考にしたほうが、ものがよく見え、遠回りをせずすむという。例えばアリストテレスの著作には、間違いや偏見がたくさんあるが、現代に生きる我々は、アリストテレスの業績を利用することで、その間違いや偏見をただしながら前に進むことができる。
- ・また作品に関する基本的な情報や先行するレビューをしっかり押さえるほうがよい。
- ・便利なものとして「批評理論」がある。批評理論とは、作品の読み時というゲームの勝ち方を探す戦略を決める理論である。作品をゲームと考え、ゴールはそれを面白く分析することだとする。面白い分析を提供できたらあなたの勝ち。アラを見つけるのではなく、楽しむことが大事。
- ・「伝記的批評」作品を作者の人生などに結びつける方法。しかし古くさいと馬鹿にされ、ニュークリティシズムにとって変わられた。
- ・著者がふだん批評研究でよく使っているのは、1970年代くらいから行われるようになった「ポストコロニアル批評」「フェミニスト批評」、1908年代くらいから行われるようになった「クィア批評」などである。
- ・ポストコロニアル批評は、西洋帝国主義に、フェミニスト批評は性差別に、クィア批評は性的逸脱とその禁止に着目している。
- ・これらの批評のポジティブな理由、作品の受け手がなんとなく感じている生きづらさを言語化する手段を与えてくれることがある。それまで見えていなかった「社会が決めた条件付け」が見えてくるようになり、それと戦うやり方もわかってくる。読みの戦略が人生の戦略に影響してくる。
- ・ネガティブな理由は、他の批評理論と比べると、なんとなくやりやすそうに見える、という誤解が上げられる。また、ある作品に隠れた差別があるとか、男性中心主義とか白人中心主義があるというようなことを指摘すると、いきなり怒る人がいる。

2. タイムラインに起こしてみる

(略)

3. とりあえず図に描いてみる

- ・「人物相関図」に起こしてみる。大がかりな物語では、血縁やら姻戚関係やらに注意しなければならない。そのために系図を作る必要がある。系図が、分析の助けになる。
- ・シェイクスピアのソネットは、たくさんの比喩が使われていてよくわからないところもたくさんある。そういうときにとりあえずやってみるのが、状況を絵に描いてみることだ。(P. 103)。図は物語の理解に役立つ。

・物語をある程度抽象化して要素に分析する。固有名詞を全部取り払って、話の構造だけを見る、すなわち抽象化することだ。精読で細かいところに注目するが、その後一度細部から離れて物語をざっくり要素に分解して整理することで、他の物語との共通性や差異などが見えてくる。そうすると、作品のどこが伝統的でどこが独創的なのかが特定しやすくなる。ポストコロニアル批評やフェミニスト批評、クィア批評などは、登場人物の性別や人種を含めた細かい特性や物語がおこった場所、歴史的な文脈などに注目するが、抽象化は、これとは逆で、特性や場所を一度全部捨てることから始める。

・抽象化の具体 (P. 108, 109) (略)

・モチーフ早見表 (P. 113) (略)

4. 価値付けする。

・作品の「友達」を見つける。友達探しで役立つ方法がネットワーキングである (P. 127)。
・これまでやってきた要素に分解する分析、ネットワーキングは、他の作品と比べてその価値をはかるのに役立つ道具である。しかし、大前提として、とりあえずは、たくさん作品に触れて、要素を抽出したり、ネットワーキングしたりできるところまで持って行かなければならない。触れている作品が少ないと、分解もネットワーキングもできない。